

【注目のイベント】
流離 (はすら) う音楽◎KARMAN (カルマン)
 四国ツアー★2016

6月6日(月) 19時～
 会場●エミール・カルチャー&マルチスペース
 徳島市庄町1-63 ☎088・637・0241 *会場は徳島市です。ご注意ください
 入場料●前売2000円(当日2500円) ★電話予約OKです。
 出演●**KARMAN (カルマン)**
 小松崎健 (ダルシマー 札幌 [ハード・トゥ・ファインド])
 岡林立哉 (馬頭琴、ホーミー 高知)
 トシ・パウロン (パウロン 東京 [John John Festival])
 主催●北島トラディショナル・ナイト実行委員会 (川竹☎088・637・0241)

【注目のイベント】
森優子朗読ライブ徳島特別篇
新朗読芝居●小泉八雲「怪談」

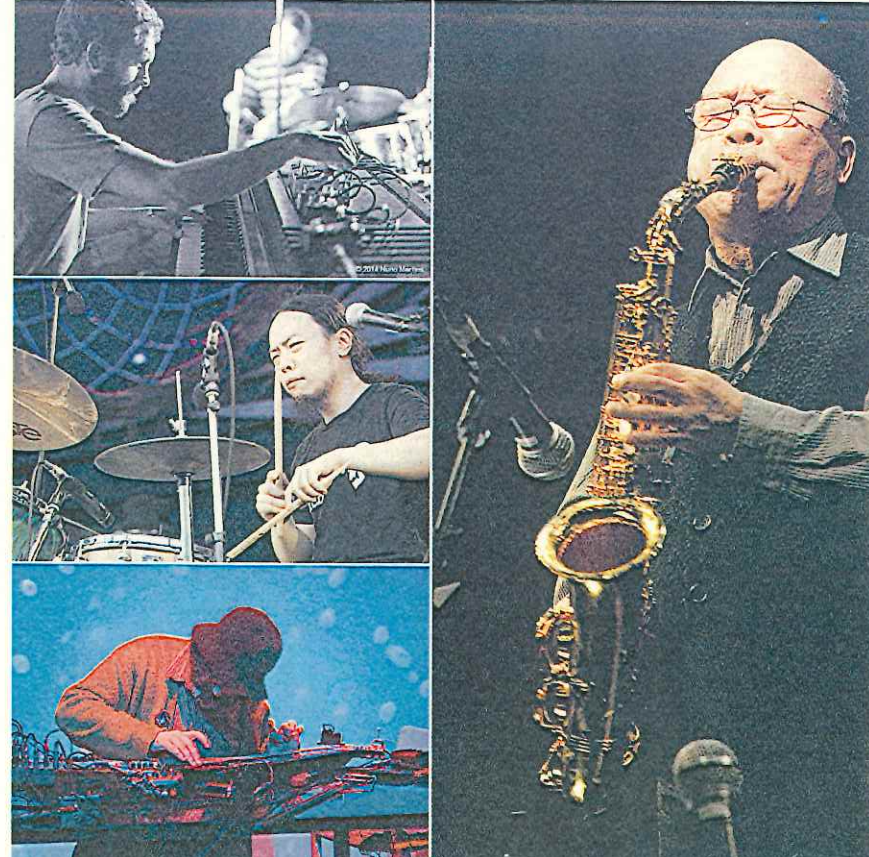
6月11日(土) 17時半～
 会場●徳島市シビックセンターホール
 徳島市元町1-24 ☎088・626・0408 *会場は徳島市です。ご注意ください
 入場料●前売2800円(当日3300円) ★電話予約OKです。
 出演●**森 優子**
 脚本・構成●鈴木之彦
 内容●小泉八雲「耳なし芳一」「和解」ほか
 主催●徳島朗読舞台実行委員会 (杉本☎090・4501・3709)
 ■2008年、徳島県郷土文化会館で上演し話題を読んだ《朗読芝居・小泉八雲「怪談」》が新たな形で上演されます。ご期待ください。

第22回徳島10人のフルーティスト
 による音の贈り物

6月19日(日) 14時～
 会場●3階多目的ホール
 入場料●1000円(前売当日共)
 出演●【フルート】鈴江早都子、吉岡仁美、安宅恵美子、三段美咲、板東久美、高見宴代、香川雅代、飯田緑、森亜紀、久保由美
 【ピアノ】篠原暁子、竹下とも子、野田由美子、平賀理恵、美馬かおり、八木佳代
 【ギター】平岡範彦
 演奏予定曲目●「シンフォニックカンツォーネ」(カークエラート)、
 「スカラムーシュ」(ミヨー)、「魅惑の夜明け」(シャンカール)ほか
 主催●フルートを吹く会(鈴江☎090・6888・2198)

坂田明グループ(梵人譚)
 ライヴ・イン徳島

7月6日(水) 19時～
 会場●3階多目的ホール
 入場料●前売/大学生・一般2500円、小中高2000円(当日各500円増)
 出演●坂田明グループ(梵人譚=ぼんじんたん/坂田明 [サクソ、クラリネット、ヴォイス]、ジョヴァンニ・ディ・ドメニコ [ピアノ]、山本達久 [ドラムス]、ジム・オルーク [ベース])
 主催●坂田明グループ(梵人譚)◎ライヴ・イン徳島実行委員会 (☎088・698・1100)
 ■世界に轟く天才的サクソ奏者・坂田明が、またもや新グループを率いて2年ぶり5度目の北島町降臨! これはもはや奇跡なり
 ■豪放磊落◎疾風怒濤◎抱腹絶倒◎驚天動地◎人柄最高◎感動必至
 ■ジム・オルークはマルチ・アーティストで近年は日本在住。坂田明との共演多数。ヘルツォークや若松孝二作品の映画音楽、ソニック・ユースでの活動歴、ウィルコのプロデュースによる2004年グラミー賞受賞などで知られる大物で、徳島初上陸■全ての愛好家は、まなじりを決して創世ホールに結集せよ!



日野皓正ライブ2016

7月13日(水) 19時～
 会場●3階多目的ホール
 入場料●前売/大学生・一般5000円、小中高3000円(当日各500円増)
 出演●日野皓正クインテット(日野皓正 [トランペット]、加藤一平 [ギター]、石井彰 [ピアノ]、杉本智和 [ベース]、石若駿 [ドラムス])
 主催●日野皓正LIVE2016実行委員会 (田淵☎088・689・1227)
 ■世界ジャズ界の最高峰・日野皓正が2010年2012年に続き、創世ホールに3度目の登場! チケットは過去2回同様、早期に売り切れが予想されます・早めにお求めください。

TERUMASA HINO LIVE 2016

熱い
 創世ホールの一夜!
 あの感動を再び!!

出演: 日野皓正クインテット
 日野皓正 (tp)
 加藤一平 (g)
 石井彰 (p)
 杉本智和 (b)
 石若駿 (ds)

日野皓正 LIVE 2016
 2016.7.13 WED. 北島町創世ホール

開場: 18:30 開演: 19:00 ●チケット: 一般¥5,000(当日¥500up) / 高校生以下¥3,000(当日¥500up) 全席自由席
 主催: 日野皓正 LIVE 2016 実行委員会 共催: 北島町立創世ホール 後援: 徳島新聞社 お問い合わせ: 北島町立創世ホール TEL: 088-698-1100 事務局 TEL: 088-689-1227

■海野十三の少年向け小説には、ハワイから出発した米国の戦艦を日本の海軍がやっつけるというような作品もありましたけれども、そうした状況がいよいよ現実のものとなりました。真珠湾攻撃によって日本とアメリカの戦争が始まり、開戦翌年の昭和17年、海野十三は海軍の報道班員として南方に赴きます。戦地の模様を実際に見聞して、それを内地に報告するのが役目だったんですけど、十三は向こうで Deng 熱というウイルス性の病気にかかってしまいます。そうすると報道班員としては使いものになりませんから、日本に送り返されることとなります。こうした場合、報道班の中の一人だけが病気で戦地から日本に帰れるわけですから、病気だから当然だと頭ではわかっている、残される人たちは帰る人に対していい感情を抱きません。両者の間に感情的な対立が生じるのが一般的だとされており、極端な場合には、病気で帰還する人の面倒をみる人間がいなくなるようなこともあったそうです。

■しかし、海野十三の場合は違いました。十三はもともと、人からとても好かれ、人の面倒をよく見て、人と融和する、親和することをモットーとしていた人ですから、十三が日本に帰ることになっても、残りの報道班員は態度を変えなく、十三と最後まで付き合い続けたそうです。それで十三、とにかく日本に帰ってきました。

■昭和20年になりますと東京も空襲を受けます。3月10日には東京大空襲がありました。東京の池袋に住んでいた乱歩もさすがにびっくりして、自分以外の家族を福島県に疎開させてしまいます。そのあと乱歩は一人で池袋の家にとどまっていたんですが、4月13日にまた大空襲があって、池袋は火の海になってしまいました。

■その大空襲の様子は、十三が残した4月14日の日記には、「○昨夜二十三時頃、わが横鎮は関東海面に警報を出したが、果たして敵1機は房総に入り、つづいて敵退去し、三月十日以来の帝都市街夜間爆撃となった」と記録されています。乱歩の自伝でも、「十三日夜、B29の大空襲あり、池袋地区焼野原となる。私の町会は南の半分が焼失し、隣組も全焼したが、私の家一軒だけ不思議に助かった」と書かれていて、乱歩の家は奇跡的に被害に遭わなかったんですけど、これでもう東京にはいられないということになりました。乱歩は6月に家族が疎開していた福島県へ引っ越して、そのまま8月15日の終戦を迎えます。

■一方、十三はどのように終戦を迎えたのか。日記を読みますと、8月10日の時点で、つまり広島に新型爆弾が落とされたことを知った時点で、これで戦争終結だと書いておられます。戦争の終結を予見した十三は、そのことで苦悩を深めていました。日記によれば、戦争に負けることは十三にとって死ぬことを意味していました。しかも一人ではなく、奥さんや子どもを含めた家族全員で死ぬことを

十三は考えていました。

■8月12日の日記には、こんなことが書いてあります。「○とにかく、遂にその日が来た。しかも突然やってきた。／どうするか、わが家族をどうするか、それが私の非常な重荷である。／○女房にその話(*みなで死ぬこと)をすこしばかりする。「いやあねえ」とくりかえしていたが、「敵兵が上陸するのなら、死んだ方がましだ」と決意を示した。／それならばそれよし。ただ子供はどうか?」。十三の奥さんは、敵が上陸してきたら死を選ぶことを決意していました。しかし、そうすると、子どもはどうなるのか。十三の苦悩はいよいよ深まります。

■8月13日の日記を読みます。「○朝、英(ひで)と相談する。私としてはいろいろの場合を説明し、いろいろの手段を話した。その結果、やはり一家死ぬと決定した。／私は、子供達のことを心配した。ところが英の言うのに、かねてそのことは言い聞かしてあり、子供たちは一緒に死ぬことにみな得心しているとのことに、私は愣きもし、ほっとした。そして英からかえって「元気を出しなさいよ」と激励された。／事ここに決まる。大安心をした」

■奥さんは子ども達を説得して、子ども達もすでに死ぬことを納得していたというわけです。それで結局、十三は一家で死ぬことを決心しました。それから8月15日、いよいよ終戦のラジオ放送です。天皇の玉音放送があって、日本の敗戦が天皇から国民に伝えられました。ついに一家で死ぬときが来たわけです。15日の日記には「夜に入りて死のうと思いたり」とありますが、死ぬことはできず、16日の日記には「○死の第二手段、夜に入るも入手できず、焦慮(しょうりょ)す。妻と共に泣く。明夜こそ、第三手段にて達せんとす」と書かれています。

■死ぬための第二手段が手に入らない。それで死ねない。日記にはそう書いてあります。第二手段というのはたぶん青酸カリのことで、十三は自殺用の青酸カリを都合してくれるよう知り合いに頼んであったらしいのですが、それが入手できませんでした。死ぬことができないまま時間が過ぎて、17日の日記には、「○昨夜妻いねず、夜半に某所へ到らんとす。これを停(とど)めたる事あり。／妻に「死を停(とど)まれよ」とさす。さすはつらし。死にまさる苦と辱を受けよというにあるなればなり。妻泣く。」とあります。奥さんが夜中にどこかへ行こうとしたので、十三は死ぬことを思いとどまれと奥さんを諭しました。

■ここでおぼろげに分かってくるのは、奥さんがなぜ死のうとしていたのかということです。生き続けると、死にまさる苦と辱、つまり死ぬよりもつらい苦しみと辱めを受けることになる。要するに、上陸した敵兵に奥さんがレイプされてしまうはずだと、十三も奥さんも考えていたわけです。終戦前後にはそういう風聞が日本全国に広まっていたから、奥さんは汚されるくらいなら死んだほうがましだと考えます。しかしそうすると、子どもを育てることができなくなります。それで奥さんは子ども達を「戦争が終わったら死ぬんだよ」と説得して納得させました。十三は奥さんからそういうことを聞かされて、最終的に一家で心中することを決意したわけです。

■しかし、もちろんまわりの人は気が付いて一家心中を止めようとしますし、死ぬための手段も手に入らない。だんだんだんだん、死が先延ばしになってしまいました。一方で十三は、友達から軍神・

杉本五郎中佐の遺稿『大義』を借りて読み、それを一種の杖として、死から生へ立ち返る、生き残るための道に引き返していくことになりました。17日の日記には、「○昨日から、軍神杉本五郎中佐の遺稿「大義」を読みつつあり、だんだんと心にしみわたる。」と書かれていて、十三の心がやや落ち着きを取り戻していたことがうかがえます。

■この杉本中佐というのは、大変な原理主義者というか国家主義者というか、いわゆる天皇帰一、全ては天皇のためにあるというような信念を抱いていた大変な、いってみれば硬直した考えを持っていた軍人だったそうですが、亡くなったあとも一部の軍人から神格化されていて、その『大義』という本が読み継がれておりました。十三もそれを読んだわけです。そうしますと、大楠公(だいなんこう)、つまり楠正成(くすのきまさしげ)ですね、楠正成が後醍醐(ごだいご)天皇に命じられて、勝てる見込みのない湊川(みなとがわ)の戦いに出撃したときのことが書かれていました。

■十三はそのあたりに感銘を受けたようで、日記には、「大楠公が愚策湊川出撃に、かしくみて出陣せる故事を思えとあり、又楠子桜井駅より帰りしあの処置と情況とを想えとあり。」とあります。正成は湊川の戦いに出撃するとき、桜井の駅というところで、同道していた自分の子どもを国へ帰してしまいます。正成は子どもに「お前は来るな。我々はこのまま戦いに行つて死んでしまうけれども、お前は生き残つて後醍醐天皇のために尽くしなさい」といって子どもを生き残らせたわけですが、そういう処置と情況とを今、考えてみよと自分自身に言い聞かせる、つまり歴史上の人物のエピソードをわが身に置き換えて考えてみることで、十三は死を思いとどまることとなります。

■8月19日になりますと、日記には、「○ようやく気もだいぶ落付く。されど、考えれば考えるほど苦難の道なり。／○夜半、忽然として醒め、子供をいかにして育てんとするかの方途を得たり。(略)有難し、有難し」と書かれていて、海野十三が精神的な危機のピークを過ぎて、平穏を取り戻してきていたことがわかります。ただしこのあたりの時点では、もう私は小説の筆をとらないと、十三は決意していました。つまり戦争中に軍事小説をたくさん書いていた、子供たちを戦争に駆り立てるような小説を書いていたことを反省して、もう小説の筆をとらないことに決めたと日記に書くんですけど、そのあと小説の執筆も再開してゆくこととなります。

■そういう十三に比べると、乱歩というのはいたって現実的な人でした。同じ8月15日のことが乱歩の「自伝」にはどう描かれているか。乱歩は福島県の保原という疎開先で玉音放送に接しましたが、「保原のラジオでは、天皇のお声はハッキリ聴きとれなかったが、あとの放送や新聞で真相がわかった。それから数日間は、米軍が上陸してきて、どんな目にあわされるかわからないというので、老幼婦女は、東京から逃げ出しているという報道が、あわただしく伝わってきた。」東京から福島にそういう情報が伝わってきたんですけど、「そのうちに、米占領軍の方針が案外温和であることが徐々にわかってきた。略奪、殺戮、暴行など、昔の戦争から想像していたようなことは、行われていないことがはっきりしてきた。」ということになりました。これが終戦前後、海野十三の奥さんをおびえさせていた風聞なんですね。(次号に続く)